



“大脳”あれこれ

常務取締役 山口敏明
スペシャリティ事業本部長

年来“記憶力”がとみに衰弱したとの自覚と、将来への怖れから、脳の本を読むようになった。また、電算機への関心が、自と人間の脳との比較を考えさせる。といったことで、大脳に関連する本をこのところ漁っている。

読んでみると、未完成な学問分野だけに、誠に面白い。年をとっても記憶力は衰えない。記憶力は保持力と想起力から成り立つ。教育と訓練によっては、想起力は倍以上、創造力は数十倍に高め得る。創造力の発揮は五十才過ぎから。人類は未だ左右の大脳を総合して充分には使っていない。等々新説、奇説は枚挙にいとまがない。

結局、記憶力については心配不要、問題があれば、コンピューターを上手に使うべし。と気持ちが落ち着いた。

そうすると今度は“創造力”が気になりだした。小生個人の問題はさて置いて、——人間の前頭葉は素晴らしい——創造力は無限である——だが我々はそれを充分に使っていない——ことに日本人の創造性は貧しいのではないか——日本の未来は——東曹に創造力ありや——我が社の将来は——などと考えたすと、脳の話も段々と面白味がなくなってくる。

日本人の創造力について、楽観説はあまり見当らない。数多い悲観説を大別すると、大脳生理説と社会システム説になる。生理説は新しく、定説ではないが、なかなかユニークで愉快である。西欧人と日本人では言語脳（左脳）の使い方に差異がある。この違いが日本人の創造力劣性につながるという説である。

社会システム説は、今までに云い古された論である。農耕民族的ムラ社会の各種制約が、日本人の創造力を抑圧してきたし、今も狭小化させているという考えである。

これらの論の当否はさて置いて、問題は我が社の創造力である。過去そして現在、当社の創造的活動と創造的成果は極めて貧困であったと反省する。

大脳生理的側面では、当社も日本の平均値にあるとすれば、創造力欠除の主因は社会システムの制約ということになる。企業におけるムラ社会的制約とは何か、論及の要は無いであろう。経営の責任を痛感するのみである。

ところで、人間の創造力は大脳の前頭葉にあるとされている。前頭葉は、困難という刺激を受けると、問題解決の意欲が高まり、極めて活発な創造活動を開始するという。

我が社の前頭葉とは何であろうか。研究開発部門がまさしくこれに該当する。東曹がメーカーであるかぎり、研究開発部門こそ前頭葉として機能しなければならない。

危機に直面して、当社の前頭葉が意欲を燃やし、旺盛な創造力を発揮することを信じている。